

水野教育長記者会見概要

日時：令和6年6月25日（火）14時～14時50分

場所：大阪府庁別館6階 委員会議室

【水野教育長より】

教育委員会の取り組みについて

皆さん、こんにちは。大阪府教育委員会の取り組み紹介としては、6点ございます。

①「大阪府公立高校進学フェア2025」「第32回大阪府産業教育フェア」の開催について

大阪府内の公立高校等の魅力と進学時に必要となる情報を伝え、中学生が進学に明確な目標を持って充実した学校生活を送る一助とすることを目的とし、「大阪府公立高校進学フェア」を開催いたします。

今年度は7月30日と31日の2日間、会場はインテックス大阪の改修工事のため、例年とは異なりまして、難波にあるエディオンアリーナ大阪で実施をいたします。

なお会場変更に伴って、ご留意いただきたい点が2点ございます。

一つ目は30日と31日で説明する高校が入れ替わりますので、ご覧になりたい高校の出展日を事前にご確認ください。

二つ目は来場者の安全確保の観点から、来年の高校進学をめざす中学生など、来場いただける方を制限させていただくとともに、事前の登録をお願いいたします。

詳細は今後、市町村教育委員会を通じて、各中学校等へ連絡させていただくとともに、府のホームページにて公表させていただきますので、ご確認をお願いいたします。

本フェアは府内にある全ての公立高校から多くの情報を収集できる機会となっております。また、この機会に知った高校の学校説明会などを通じて、より詳しく学校生活を知っていただいた上で、生徒たちが、自分に合った高校選びを進めていただきたいと思います。

今年度は会場のキャパシティの関係で、制限もあって大変心苦しいところではありますが、逆にアクセス自体はしやすい場所になっておりますので、中学生の皆さんにはぜひ積極的なご参加をお願いします。

また、例年進学フェアと同時開催しております「大阪府産業教育フェア」については、今年度は8月4日に近畿大学 東大阪キャンパスで開催をいたします。

産業に関する学科や系列を設置する府内の高等学校等の生徒が学習の成果を総合的に発表することにより、本府の産業教育の活性化を図ることを目的としております。

こちらは中学生に限らず、小学生をはじめ、一般の方々にも楽しんでいただける体験や展

示をご用意しております。

市町村教育委員会を通じて、各小中学校等へ連絡させていただくとともに、本府ホームページにおいてもご案内をしております。

産業教育フェアにつきましては、事前申し込み等は必要ございません。夏休み中の小中学生をはじめ、保護者の皆様など多くの方のご来場をお待ちしております。

②「高校生万博チーム」企画運営チームの発足について

教育庁では、いよいよ来年開催されます大阪・関西万博において、万博パビリオン等を活用して、実際にパフォーマンスやワークショップを行うための企画運営を、府立の高校生が主体的に行う「高校生万博チーム」を立ち上げました。

府立高校および府立支援学校高等部の1・2年生の生徒を対象に募集したところ、11校から45名の応募がありました。

早速ですが、6月15日にキックオフミーティングを開催し、集まった生徒からは、「世界中の人が集まる万博にしたい」、「平和を象徴するダンスをしたい」など、日本の高校生の体験、そういうものを発信したいというような企画案が出されたそうです。

今後は、月1回程度の会議を経て、万博パビリオン等における出展やパフォーマンス発表の企画を立案し、次年度の万博会場での発表本番に向けて、企画を具体化していきます。

なお、「高校生万博チーム」は、万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現に向けて、全ての命を輝かせる活動を展開している大阪大学と、経済団体で設立した「いのち会議」と共催しております。

こうしたことから、府教育庁としましては、日本国内のみならず、世界の各国からたくさんの方々に来場される万博という大きな舞台で、今後の未来社会を担う高校生が学校の枠を超えて、ともに企画を作り上げ、一生の思い出に残るような取り組みを実現してくれることを期待するところです。

③令和7年度大阪府公立学校教員採用選考テストの志願者数について

令和7年度の大阪府公立学校教員採用選考テストの志願者数について、採用予定者数1,230名に対し、5,680名の出願がございました。

また、今年度から開始しました大学3年生等を対象とした選考には、668名に出願していただきました。

全校種の志願倍率は、4.6倍で採用予定者数を増やしたこともあり、前年度より1.3ポイントの減少となりましたが、今年度も多くの志願者に出願いただいたと考えております。

6月15日に第1次選考の筆答テストを実施し、一般対象選考の受験率は87%、大学の3年生を対象とした選考の受験率は93%となり、特に3年生受験の皆さんに数多くチャレンジしていただいた結果となりました。

今後、6月28日に第1次選考の結果発表を行いまして、7月上旬から第2次選考の面接のテスト、8月中旬に第2次選考の筆答テストと実技テストを実施予定です。

大阪府としましては、このような選考を通じて、優秀な人材を確保していきたいと考えております。

④講師希望者登録説明会の開催について

大阪府教育庁では、大阪府内公立学校教員の欠員解消に向けて、教員免許保持者の掘り起こしや、教員のキャリア形成のサポートと、年間を通して講師の確保に努めているところです。

この度、7月3日・10日に大阪教育大学 天王寺キャンパスにて、また7月18日に北河内府民センターにて、講師希望者登録説明会を開催いたします。

大阪府の教育事情等が学べる研修や、市町村教育委員会の担当者による個別相談会も予定しています。府内公立学校での勤務に興味をお持ちの方は、ぜひご参加いただければと思います。

講師登録については、説明会当日に限らず、オンライン等で随時受付をしております。詳細は大阪府のホームページをご覧ください。

前回の記者会見でもお伝えしましたとおり、「教員免許状はあるけれども、教職に就いたことがない方」や「教職から長く離れていたけれども、もう一度教育現場で働きたい方」等を対象としました、「教員スタートアッププログラム」を5月19日に開催いたしました。参加いただいた41名のうち、少なくとも2名の方が講師として勤務を開始されることとなっております。

同プログラムにつきましては、今年度あと2回開催する予定です。詳細が決まり次第、改めてお知らせをいたします。

⑤「バリアフリー映画会」の開催について

府立中央図書館のライティホールにおいて、7月6日（土曜日）に、「バリアフリー映画会」を開催いたします。なお、入場は無料となっております。

バリアフリー映画とは、字幕や音声ガイドをつけることで、より広くたくさんの方に楽しんでいただける映画のことです。当日は、受付・司会進行に手話通訳者も配置いたします。

介助が必要な場合は、事前にご連絡をいただければ、図書館の最寄り駅である大阪メトロ・近鉄 荒本駅からの送迎も行います。

また、映画の上映前には、中央図書館が障がいのある方々への読書活動支援として実施している、様々な「障がい者サービス」についてご説明いたします。

今回、上映するのは、2013年に公開された映画「じんじん」です。離ればなれになったお父さんと娘さんを繋ぐ1冊の絵本の物語で、親子の絆や人々の優しさを描いた名作です。

映画鑑賞は、ご来館、インターネット、往復はがき、FAXでお申し込みください。受付

はすでに開始しております。先着順で、定員 330 名に達し次第受付を終了いたします。

映画会は、どなたでもご参加いただけます。障がいのある方、本・絵本が大好きな方、中央図書館で実施している障がい者サービスについて、興味・関心をお持ちの方、そして、心温まりたいと願っている方など、日頃、中央図書館にいられていない方も含めまして、いずれの方も大歓迎です。お申し込みをお待ちしております。

⑥府立博物館夏季特別展の開催について

府立弥生文化博物館と、近つ飛鳥博物館の両館で、7月6日から9月8日までの間、夏季特別展を開催いたします。

弥生文化博物館では、「土器研究の可能性 新たな分析と弥生社会」と題し、自然科学や民俗考古学、文字資料との総合研究など、これまでとは異なる新たな視点に基づく土器研究の成果や、「チョコレート色」という個性的な粘土と、高度な技術を用いて作られました弥生時代像の解明について重要な位置を占める「生駒山西麓産土器（いこまやませいろくさんどき）」を紹介いたします。弥生土器だけではなく、パプアニューギニアの土器のほか、実際に化学分析に使用された土器など、約 140 点を展示します。

今回の展示は、情熱を持って休日返上で時の研究に邁進する方々のご協力を経て開催するものでございます。このような研究者の皆さんが、土器のどこを見て面白いと思うのかなど、わかりやすく解説いただけます。

また、近つ飛鳥博物館では開館 30 周年とともに、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録 5 周年を記念しまして、「5 周年！すごいねん！！百舌鳥・古市古墳群！！！」を開催いたします。

古墳群のある堺市、藤井寺市、羽曳野市とも連携し、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録後の発見や研究成果を中心に、約 230 点の資料を展示いたします。

開催初日の 7 月 6 日は世界遺産登録記念日でもございまして、翌日の 7 日と合わせた 2 日間は入館料を無料といたします。この機会に、より多くの方に、大阪が誇る世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の価値や魅力を知っていただき、ぜひ現地の古墳も訪ねていただきたいと思います。

両館とも、特別展の会期中、講演会の他、夏休みに合わせて、子どもたちにも楽しんでもらえるワークショップなど、様々なイベントを行います。皆様のご来館を心待ちにしております。

○「学校訪問」について

私、教育長による学校訪問も 5 月 14 日から 6 月 21 日に伺いました。最新を言いますと、本日の午前中、府立箕面高校に行き、実際に学校現場を見て、校長先生と対話をしてきたところです。

私からは以上です。

【質疑応答】

○大阪府公立学校の教員の欠員状況について

(朝日新聞)

講師登録説明会のご説明のときに、「欠員への対策」という話あったと思いますが、現状、最新の大阪府での欠員の状況について、教えていただけますでしょうか。

(水野教育長)

最新においては、5月1日時点の数値となりますが、小学校で68名、中学校で33名、府立高校6名、支援学校7名が常勤講師枠の欠員となっております。

○教職員の確保に向けて

(関西テレビ)

関連でお伺いしますけれども、「スタートアッププログラム」ですとか、「免許を持たれて長く勤務されてない方を、もう一度、教育現場で」と、今取り組みをされているかと思うんですけれども、どうしても講師からのスタートになりますと、一定、職が正規ではなくて非正規ということになるかと思えます。今、別のお仕事で正規で働いている方とかは、ちょっと行きづらくなっていうところもあるかと思うんですけれども、そのあたり、何か教育庁として、マッチングといいますか、対策について、考えてらっしゃるところは、何かありますでしょうか。

(水野教育長)

今おっしゃった、既に正規で働いている方というのが一番ハードルが高いと認識しております。ここはやはり、国の制度であるとか、そもそもの教員の免許制度、採用制度、そのところの大きな議論にはなってくるという認識です。

ですので、我々がイメージするのは、先ほど少し触れたように、少し教員として離れていた方が、もう一度戻ってくる事例であったり、既に違うお仕事だけれども、柔軟性のある働き方をしている方が、さらに違う日程のところ、プラスアルファのところ、教育現場でお勤めいただく、ここからが一番やりやすいかなという認識ではあります。

○大阪府公立高校進学フェアについて

(日経新聞)

公立高校の進学フェアについて、今年は会場の制限もあって、来場人数が制約されるということでしたけれども、例年どのくらいの人数の中学生がいらっやっていて、今年はどれくらい来てほしいのかなど、そういう思いなどありましたら、伺わせてください。

(水野教育長)

そうですね、やはり高校の進路を決めるというのは、それこそ私もちょうどそういう世代の親ではあるんですけども、自分の学力に合ったところを単に選ぶだけではなくて、やはり「行きたい」、「自分が高校3年間でこうなりたい」という、その「ありたい」から逆算して、その進路を選んでほしいなというのは、思いとしてあります。

そのためには、積極的に中学生たちが情報をキャッチする機会を作っていくこと、そういう情報の場を作ること、先ほど申し上げたように、生徒側も主体的に情報を取りに行ってもらうことが一番大切かなと思っております。

ですので、それこそ理想的な回答としては、公立高校をめざしたい子は全員来てほしいと思っております。

昨年の実数値に関して、今、手元には資料がございませんが、思いとしてはそのような思いであります。

(産経新聞)

進学フェアの質問に追加でお尋ねしたいのですが、教育長就任のときから、「PRに力を入れていく」というお話を強調されていたと思うのですが、この進学フェアは例年行われているものだと記憶しておりますが、「例年と比べて今年こういうことを新しく始めます」ということがありましたら、教えていただけますでしょうか。

(水野教育長)

そうですね。力を入れているのは、本当に間違いないことでありまして、ただこの進学フェアに関しては、会場の都合もあって昨年度来より進めている形ではあります。そこが大前提ではあるのですが、今回、2日間に分けることで、1ヶ所で全てのところが見られるというよりは、自分のターゲットとするとところを見られるというところで、さらに2日連続見られない、1日しか来られない方のために、例えば2日目しか行けない方は、2日目の会場には初日の学校案内であるとか、そういうなものもしっかり置いていくという工夫はしているところでございます。

あとはやはりそのブースの中で説明を尽くしていくというところは変わらないかなと思っています。

○府立高校の入試日程の変更について

(関西テレビ)

先週、教育審議会の方で、府立高校の入試日程の変更等の素案が示されたかと思えます。この件について、まず率直に教育長として、この入試制度の改善について、どのように受け止めているかというのをお聞かせください。

(水野教育長)

ちょうど学校教育審議会の最後の挨拶でも言わせてもらったことではあるんですけども、当然、現段階においては審議会での議論というものを進めていくための、たたき台でございまして、決定ではありませんけれども、あくまでその前提での受けとめとしましては、選抜制度というのは、やはり中学生の教育活動にも影響を与えるものであると考えております。

当たり前の話であって、受験の日程や受験で求められる資質が変わりますと、中学校での授業というのは、当然そっちに合わせていきますよね。つまり、入試制度を変えるというのは、決して入試だけの話ではなくて、義務教育段階の「学びのあり方」にも影響を与えるものであると認識しております。

さらに府立高校の意識の変革、先ほどもご質問いただきましたけれども、プロモーション、ブランディングというものも、より一層、高校側には求められていくと感じております。

そのように選抜制度の改革というのは、ちょっとわかりにくい言い方かもしれませんが、「ただ選抜を変えるだけではない」というのが私の受け止めでございます。そういった大きな変化に繋がっていくものであるために、やはり子どもたち自身の視点に立ったときに、子どもたちが努力をすれば、行きたい学校に行けるようにするためのものである、そうすべきであると考えております。

審議会の議論を踏まえまして、我々、大阪府教育委員会としましては、多様な子どもたち、様々な個性を持った子どもたち 1人1人が、それぞれの行きたい府立高校で伸びていくような教育を進めてまいりたいと思っております。

(関西テレビ)

協議中であることはもちろん承知しているんですけども、事務局の素案どおり、日程を変更することは、今の子どもたちにどのようなプラスの面があるというふうに考えているのか、改めてお聞かせください。

(水野教育長)

あの素案どおりには行くかどうかというのは、もう重ね重ねになりますが、まだ確定事項ではございません。ただ概ね、学校教育審議会の委員の皆さんのご意見というのは、総論の部分では良い案ではないかというようなお答えもいただいております。もし、そのようになれば、例えば、中学校の卒業式を迎える前に、公立高校の合否がわかるというところは、一つの変化かなというふうにも思います。

そうなりますと、中学校最後の、例えば、2週間の過ごし方というのも変わってくることも想定がされます。カリキュラムの進捗というのも一定変わってくる可能性もあります。そして、私立の専願者の入試がもちろん先にはあるんですけども、その間の時期の教室の雰囲気も変わるかもしれませんよね。

子ども目線に立ってイメージをすると、そのような変化は起こってくるかなと思います。あとはやはり、学校目線、先生方目線においても、やはり問題というのは当然、作り手がおりますので、そういう入試問題を作るスケジュール、場合によっては内容、その辺りも影響が出てくるものだと捉えております。

(関西テレビ)

私学の無償化制度が始まる前から、このことについては議論が行われていることは重々承知の上でお聞かせいただきますけれども、従前から私学との切磋琢磨ということをおっしゃっておられるかと思っておりますけれども、その中で今回の制度の改善が、私学との切磋琢磨ということに繋がるのか、府立高校の志願者の確保というところに一定、何か寄与するものなのかどうかというところの所感をお聞かせください。

(水野教育長)

ここもやっぱり私立さんのお立場、これまでの日程のところも含めまして、影響は出てくる問題ですので、入試改革も含めてやっぱり公立と私立ってというのは、子どもたちの行きたい進路の実現に向けて、お互いよりよいものにしていくんだというところが、まず根本の部分で合意をしているというのが、我々大阪府教育庁としての強みかなと思っております。

やはりめざすべきは、それこそどうしても公立、府立高校の立場で言うと、「志願者割れが増えてきている、「私立さんに流れてるんじゃないか」というのは、府立高校側、設置者の我々側の視点でもあります。しかし、私学側さんの視点に立てば、専願において、ご自身の高校に行きたいと言って、手を挙げた子が多く来てくれたのは一つプラスの面ではあろうけれども、いわゆる公立高校が残念ながら不合格で、併願で戻ってくるということは減ってしまったのは、ネガティブな情報として受け取られるかと思うんですね。

ここは両方の視点がありながらも、大切なのは、大阪の中学3年生たちの進路が幅広く、それこそ家庭、家計の状況に関わらず、少しでも選べられるような、そういう制度設計にしていく必要がある。ここの根本のところはやはり変わらないかと思っております。その上で、府立高校の入試制度を変えていくと、私学さんにも当然影響が出てまいりますので、今はまだ素案を出して学校教育審議会で今答申を諮問している段階ではございますので、これから私立さんとも、そういう情報を共有していきながら、それこそ意見交換していきながら、どこがベストであろうか、どこがベターであろうか、それはこれからのステージとしては想定をしているところです。

○府立高校の入試における「特色枠」について

(日経新聞)

学校教育審議会についての関連で、これまでなかった特色入試の導入も示されています。もちろん、これはたたき台であるということは承知の上で、こういう特色入試との前提には、

やっぱり各公立高校の特色だとか魅力っていうのを、中学生とかその保護者に知ってもらう必要があると思います。

以前から教育長は「プロモーションに力を入れる」という話をされていますし、先日の審議会のときも、ブランディングについても言及されていましたが、各高校にどういうプロモーションを求めていくのかという具体策があれば伺いたいです。先月の府議会で、SNSを使った発信方法にも検討していくという発言がありましたけれども、その点も絡めて伺えればと思います。

(水野教育長)

そうですね。特色枠というのは、もしかしたら、皆さんの会社の採用のあり方で捉えると、ずいぶんわかりやすくなるのかなとは思うんですね。日経さんはどういう採用の仕方ですか？

(日経新聞)

日経新聞は、普通にエントリーシートを提出して、それに基づいて面接、その上で小論文、あとは時事問題テストみたいなものです。その上でさらに面接が何回かあって採用されるという形になります。

(水野教育長)

面接のポイントってどこなんでしょう？

(日経新聞)

そうですね。これは人それぞれによるかと思いますが、当然、経済だとか、そういうことに関心を持っているかどうかは、誰しも問われていることだと思います。

(水野教育長)

そうですね。おそらく、その形に近いのかなと思うんですね。府立高校が、「うちのこういう高校です」、「こういうスクールミッションを持っていて、こういうアドミッションポリシーを持っています。」、「ゆえに、それになう学生さんに来てほしい。」と思うわけですよ。

それを見極める形って何なんでしょうか、というのが特色入試の今回の形ですので、どちらかというとう大学の入試の特別選考であるとか、あとは企業さんの場合は、もう明確に「こういう人材が今年欲しい」というのがあって、おそらく面接で記者の皆さんであれば、「いや、僕は足で稼いで、とにかく足で稼ぐ記者に憧れています。」っていうものを求めていけば、そういう面接をお話しされたり、論文を書かれた方はポイントが上がる。

欲しい人材と、そこで伸びたい人材のマッチングの話かなと思います。これが、特色入試

の今回めざしたい形ではあります。ただ、懸念というか、我々自身がここを乗り越えないと、この特色入試はより良いものにならないなと思うのは、今言ったような、「そもそもこの学校は、どういう特色のある高校で、どういう人材を求めているか」の解像度が低いと、当然入試の内容は決めづらくなりますよね。

そこはこの特色入試、特色選抜というものが、もし形になっていったら、同時に進めないといけないところかと思います。そのような中で、二つ目のご質問でいただいた、SNSを通じたプロモーションというところ、ここに関しましても、ちょっと企業に置き換えていったときに、なんで日経新聞社さんに行こうと思ったんですか？

(日経新聞)

新聞記者になりたかったというのが大前提にあります。

(水野教育長)

ですよ。そこ前提ですよ。何か先輩に誘われたとかはないですか？

(日経新聞)

いや、先輩に誘われたとかはないです。

(水野教育長)

それがもしあればと思ったんですけども、企業で、よくOB訪問ってあるじゃないですか。それこそ、毎日新聞さんとかが、4年制大学の方に行って、「こういう働き方をしてますよ」と後輩に言って、それで憧れてくるケースは従来からあるやり方だと思うんですよ。採用の段階では。

今回、生徒、今の現役の高校生が、例えばしっかりと研修を受けた上でSNS等を使ってプロモーションをするというのは、まさに「先輩がこうやって今、この高校で輝いてるよ」というのを、今の中学生たちに示していくことが、プロモーションとしては大切ではないかという考え方です。ゆえに、いろんなSNSのやり方はあると思うんです。それぞれ高校のカラーにもよりますしね。そこに関して進めていきたいという意図です。

○SNSを活用した学校のプロモーションについて

(日経新聞)

何度も重ねてすみません。そのSNSを使った発信というのは、いつぐらいから導入されたいというのはあるでしょうか。

(水野教育長)

実はですね、議会でも答弁させていただきましたが、いつから始めるというよりか、既に

始まっているところも多々ございます。教育長による学校訪問のところも、私は訪問する前に必ずホームページ見るんですよ。その学校がどういう発信をしてるのかとか、そのときに、結構 SNS のリンクを貼っていただいて、とある部活動のインスタグラムがあったり、とある生徒会の発信に対する X のアカウントがあったり、既に走っているところもあります。

私としてはそこも見せていただいて、結構自分の X のアカウントも今回 4 月以降ちょっと発信が多めにはなっているんですが、結構子どもたちの SNS の方もそれで確認したり、見せてもらったりもしております。

○公立高校の定員割れ増加の現状について

(日経新聞)

ありがとうございます。最後にもう一点だけです。昨年度でしょうか、公立高校で 70 校の定員割れという状況でしたけれども、かなりこういうふうに関立高校の魅力が上がるように取り組まれていることと思いますが、数値的な目標で、今年度や来年度だとかで、どれくらい定員割れの「ここを減らす」など、そういったものって、既にご検討されていらっしゃるでしょうか。

(水野教育長)

個別の話なのでちょっと難しいところで、私の今の立場で担当課に、例えばですけれども、「定員割れを 0 にせよ」というようなミッションは出しておりません。これもなかなか繊細な問題も含んでおりまして、やっぱり府立高校には、すごい特色があるわけですよ。その中には学力的に下位と言われている層であったり、エンパワメントスクールやステップスクールと言われているような府立高校もあります。

そのときに我々の 1 丁目 1 番地の忘れちゃいけない府立高校のミッションは、「全ての望む方に、高校教育の機会を提供すること」だと私は思っているんですね。そのときにですよ、エンパワメントスクールやステップスクールが 1.2 倍だったら、入れないですよ。

なので、そういう高校は 1.0 を超えてしまうと逆に、我々としては、絵の描きかたとしては、ちょっと苦しい描き方をしたというふうにも捉えられるかもしれません。逆に中間層、学力的に中間のところに関しても、それぞれの特色がございますので、「単に 0.95 から 1.0 になる」、これは、もしかしたらいいかもしれない。しかし、「0.95 から 1.5 になる」ということは、「それだけ受け入れられなかった子を生み出してしまった」という捕らえもできませんので、実は、この 70 校が定員割れというのはセンセーショナルな数字でもありますし、ここは真摯に私も受け止めてよりよいものにしていこうとは思いますが、この定員割れを、0 校にするのがいいのかという議論には、短絡的には結びつけないとは思っております。

○現行の府立学校条例に関連して

(毎日新聞)

今の質問で、確認したいんですけど、今のご発言の形でいくと、現行の府立学校条例にある、「定員割れが3年続くと統廃合の対象になる」というルールからいくと1.0を切ったところは何年かしたらそういう俎上に上がってくるってということになると思うんですけど。今の教育長の話だと、定員割れをしている学校もないと、やっぱり受け皿として難しい部分もあるというお話だと、ちょっと矛盾が生じているような気もするんですけど、そこら辺はどういうふうに考えたらいいんでしょうか。

(水野教育長)

その制度と私の言っていることが矛盾と言ってしまうっていうのも、ここはもう少し、ふわっとした捉えが必要なところですよ。今おっしゃっていただいた、3年定員割れをすれば統廃合だというの、読み解いていったら、そもそも違うじゃないですか。

再編整備の俎上に上がってくるということで、実際に3年、定員が割れた学校に関しても、様々な機能を付け加えたり、割れ方によっては、ここはこういう特色を出していったりして様子を見ていこうかっていうのは、ケースとしてはございますので、やはり単純に「3年割れたから、もう閉校します」というものではないということが、まず前提が大切かなと思います。

ただ、そのまま何も手を打たずに、割れ続けているというのは、これはよろしくないとも思います。ですので、そこは各校の現状、見せたい特色、割れ方、イコールニーズですよ、この辺りを分析して行って、再編整備の俎上にのせた上で、「それでも難しいよね」というのは、最終的には統廃合の議論になっていくというのが、そもそものたてつけだという理解しております。

(毎日新聞)

少し深くというか、広く捉えて、そこが続いたとしても、そういう微調整というか、いろいろな施策を打つことで、また改善していけばそれはそのままでもいいということですか。

(水野教育長)

そうですね、そういう事例も実際ございますし、そういうふうのできるのであれば、してもいいと思います。冒頭におっしゃったような、「3年割れて、こういう工夫をしていたけれども厳しいな」というところでしたら、やはり子どもの総数が減っておりますので、そのような中で統廃合を慎重に検討していくということも含めての、3年での定員割れの話かなと思います。

(毎日新聞)

それでは統廃合というか、府立学校条例を特に何かいじるってということにはならないということですね。

(水野教育長)

そうですね。現状の条例がそのように書いておりますので、その通りの認識で私も捉えております。

○公立の定員割れと私学を選ぶ理由の分析について

(読売新聞)

1点、確認というか、お伺いしたいのですが、公立の定員割れという現状と、私学志向の高まりで、7:3であった公私の比率が6:4に近づいているという現状です。私学を選ばれるというか、生徒さん側で選んでいるその観点というか、そのあたりで、教育長の方でどのように受け止めていらっしゃるか、その辺りちょっとお聞かせいただいてもよろしいでしょうか。

(水野教育長)

まさに、私立の無償化制度が始まっていって、どのような影響があるのかっていうこの検証をしていかないといけないと思うんですね。今、おっしゃった質問がまさに検証で一番大切なところで、私学に行かれた生徒や保護者がなぜ行ったんですかっていうところを、私も実はここは見ていきたいなというところなんです。あくまでファクトとして持ち合わせるものはないという前提です。

私自身の認識としましては、やはり私立さんのプロモーションというのは、すごく上手だなというところなんです。あとは、あんまりこれについて私が言いすぎると、公立高校をよろしくないような捉え方にされると、これはこれで困るんですけど、私学さんというのは教員も、いわゆる採用をして雇用するわけじゃないですか。

つまり異動がなくて、そこの建学の精神にのっとった、その時々的情勢に合わせた経営と教育ができるのが私学の強みだと思うんですね。

前職のときもコロナ禍で学校が開けられない休校になった際でも、やはり公立としても、ものすごく私自身は尽力したつもりなんですけれども、私学さんのオンライン授業とか早かったですよ。やっぱり、そこは、私学さんの強みかなというふうにも思っております。

実際に私の周りでも私立の専願で私立に行きたいんだっていう保護者やお子さんから、たくさんお話しをお伺いしたこともあるんですけども、その中では、やはり「部活動が盛んである。」「施設がすごく綺麗だった。」「オープンスクールに行ったときの、先輩の姿がすごく良かった。」、そのような声を聞いております。これは私学側の、そこを求めた方のあくまで感想レベルで個人的には聞いているところです。

ただ、逆に「府立高校になんで行ったの?」という同じ質問を府立高校に行った生徒にしても、結構同じ領域の答えが出たりするんですね。「オープンスクールに行ったときに先輩の活動がかっこよかった。」「部活動がすごく盛んだから」、「公立は結構自由な校風」、「なんか自由にやりたい。」「中学校のときのような雰囲気をそのまま高校でも過ごしたい。」という声もあります。

ただこれも私立・府立の話ではなく、私立の特定の学校、公立の特定の学校の話であって、なかなかセグメント分けが、きちっとできるものではないのかなと思います。

おそらく、私立でも公立より自由な学校もあると思います。ここは、今私ざっと感想ベースでお伝えしましたがけれども、やはり私立さんを選びたい方にとっては、選べるような制度になったら、より良いと思うし、公立に行きたいっていう保護者・子どもたちがいるのであれば、そこを柔軟に受けれるような、そういう制度になっていくような検討は必要であろうかなと思っています。

(読売新聞)

ありがとうございます。そうしますと、例えば公立側のニーズですね、行きたい生徒・保護者・府民のそういったニーズのようなものを汲み取っていくとか、そういった手法とか、そのあたり検討されたりすることってあるんでしょうか。

(水野教育長)

そうですね。おそらく私立と公立の切磋琢磨というのはもう散々、前教育長のときからおそらく皆さん取材もされてるかなと思います。私自身もそこを否定する立場ではありません。ただ切磋琢磨っていうのは、シェアの食い合いではないと思うんですよ。私立のいいところを府立側もしっかり学んで、プロモーションの部分とか、そういうところを学んでいき、私立さん側も、場合によっては今、多様な背景を持った子どもたちが多かったのであったら、公立が結構、力を入れている誰1人取り残さない、そういう支援体制であったり、いわゆる面倒見の良さというの、私立も取り入れていかなくちゃいけないよねという学び合いがあって、最終的に大阪の教育力全体が高まっていく、これが切磋琢磨の意味合いだと、私は思っています。シェアの食い合いじゃないと分析をしたときに、やはり近年、増えているのは通信制ですよ。

こういう場で、特定のちょっと学校名を出すのはあれですけども、CMとかもたくさん持たれてるような、そういう通信制であったり、いわゆるネットで完結したり、スクーリングが少なかったりするようなところに進路を選ぶ中学生が一定数増えているというのは、いわゆる市場の調査としては見えてきているところではありますので、それをもって、府立高校が、例えばメタバースだけで完結するような学校を作るべきかっていうとこれはまた、それぞれの役割というもの、めざすべきところがあるので、そこはもうそちらに任せていこうとするのか、いやいやそこを任せていたらどんどんそのシェアが拡大してしまうっ

ていうのであれば、学ぶべきものはしっかり学んでいかななくてはいけない、結構、このあたりはもうマーケティングかなと捉えております。

(読売新聞)

ありがとうございます。具体的に、そういう調査とかそのあたりをやっていこう、そういうことも考えていこうというお考えでしょうか。

(水野教育長)

そうですね。ついつい、あの公立と私立に何%ずつ行ったかの議論に実際になりがちなんですけど、実はそれ以外のところが今増えてきているというデータを私自身がこうやって語れるということは、そのような分析も今進めているところだというふうにご理解いただければなと思います。